

コミュニケーション活動を通じて 高まる総合的な英語力

新潟市立万代高校

10年前に新潟市立沼垂高等学校から改組・改称して誕生した新潟市立万代高等学校は、全日制の単位制高等学校だ。総合選択制の「普通科」と県下でも唯一の「英語理数科」からなる、生徒一人ひとりの進路希望をかなえる学校として人気が高い。英語理数科の英語コースでは、英語教員が一体となって、ディベートやライティングなどの活動に取り組み、生徒の表現力を高めている。生徒の英語力向上のために日々奮闘する先生たちの熱い想いを聞いた。



英語で考え、伝える力をつけるために

「国際社会を生き抜く人を育てたい」と考える山田寿子校長は、かつて自身も英語教員として教鞭を執っていた経験を持つ。「国際社会を生き抜ける人が育たなければ、日本は沈んでしまいます。そのためにも教員が意識を変えなければなりません。英語の授業は何の力をつける場か。それは、英語運用力を高めるために、英語で考える力をつける場です。それには、教員自身も英語を使って授業を行い、生徒に英語で活動をさせることが必要なのです」と語る。



英語理数科は1学年のうち1クラスだ。生徒は入学時点で既に英語コースに進むか理数コースに進むか決めている。毎年、40人の生徒がおよそ半数ずつに分かれるため、授業は20人程度の少人数制で、個々の進捗を把握しながら指導できる。英語コースでは1年次の英語が週8単位であり、「総合英語」や「異文化理解」といった専門性の高い科目が用意されている。情報機器を活用して、英語でのプレゼンテーションの資料をまとめる活動にも取り組んでいる。

「2年生によるプレゼンテーションの授業で、ある生徒は世界のヌードルについて調査し、その結果と考察を英語でまとめ、発表していました。質疑応答の時間もあり、用意した英語をただ話すだけでなく、臨機応変に考え、答えていました。国際社会で必要とされる力が養われています」

教員同士のチームワークで受け継ぐ万代の英語

英語コースの目標は「英語で自己表現のできる高校生を目指す」ことだ。1年生のうちから、グループでのプレゼンテーションはもちろん、ミニディベート、スピーチも取り入れ、実践的なコミュニケーション能力を高めている。

校内での発表の場も多い。入学後初めてのプレゼンテーションの場は、夏休みに開催される「一日体験入学」だ。新潟市内外から毎年1000人ほどの中学生が来校するイベントで、英語コースの1年生20人が、



4人組のグループをつくり、PowerPointでまとめたスライドを用いて、学校生活について英語で説明する。生徒たちは校内で写真を撮るなどして資料をまとめ、前年の録画映像を参考に発表内容を考え、準備を進める。

2、3年生になると、教科書の内容をグループでまとめて発表したり、10年後の自分にあてた手紙を書いたり、オリンピックなどのイベントについて調べ学習をして発表し合ったりするなど、身近な話題から社会的な話題まで幅広く英語で自分の考えを伝える力をつけていく。

英語科主任の三本朗子先生は「実践的なコミュニケーション能力は真の英語力であり、大学入試に打ち克つ力になる」と信じて指導にあたる。その想いは、英語科教員全員に共通する。教員各自の取り組みは、実際にプレゼンを見学したり、教材を引き継いだりすることで受け継がれてきている。コミュニケーション活動の進め方も資料があり、新任の先生であっても、同じように授業を進められるようにしている。また、1年生でプレゼンテーションの機会があれば、2、3年生を受け持つ教員も担当の生徒と共に見学し、3年生のスピーチを1、2年生の教員も担当の生徒と共に見学する。そして、授業後に意見交換をして、次へとつなぐ。こうしたチームワークが万代高校の英語教育を支えている。

英検を活用して大学入試にも備える

コミュニケーション活動を大切にした授業は、平成25年度から本格実施となる新学習指導要領にも通じる。だが一方で、高校には大学入試も視野に入れた指導も求められる。コミュニケーション活動を中心とした授業を、いかに大学入試につなげていくか。同校では、授業はコミュニケーション活動中心、家庭学習での課題、補習や土曜講習などで入試対策にも取り組む。その際に役立つのが、英検だという。2年生対象の土曜講習では、英検準2～2級の長文問題を活用して、60分の授業で問題を解き、解答と解説を行って学習する。3年生でも過去問題を使い、初見問題に取り組む実践的な学びを取り入れている。



英語科の平井望先生は「長文問題では毎回新しいテーマが取り上げられるため、生徒が興味を持って読める内容であり、トピックセンテンスがわかりやすいと思います。問題も良質で解説しやすいですね」と話す。

英検を活用した学習にあたり、授業担当教員は「英検による入試や就職での優遇措置」があることを説明する。そして、英検の過去問に触れて、生徒の英検受験への意欲も引き出す。一次試験直前には、放課後に受験者を集めて対策講座を開き、一次試験合格者には、英語科教員とALTで担当を振り分けて面接指導を行う。渡邊大介先生によれば、平成23年度第2回の受験者はわずか10名程度だったが、今年度同回では受験者は30名に増えたという。「今後はさらに受験者を増やしたいですね。来年度からは英語コースの英検受験必修化も検討しています」と意気込みを語った。

いつか英語を使ってコミュニケーションするために

三本先生は「日々の授業は練習の場、発表会は練習試合、そして本番はホームステイや卒業後に出会う人々と英語でコミュニケーションするとき」と説明する。同校では、これまでEメールやSkypeを通じた海外の高校生との交流に始まった交換留学の制度があった。海外からの留学生と英語で話したり、海外へ留学して現地で英語を使って生活したりする体験は、実践の場であった。さらに、平成24年度からは1年生の希望者を対象とした新たな海外研修制度がスタート。



年度末の春休み中に、カナダ・バンクーバーを訪れる予定だ。山田校長は「感性が柔軟な10代のうちに海外を見ることは、生徒の心に大きな種をまくことになります」と語る。今後はこの研修制度をより推進していくつもりだ。

国際化がますます進み、世界の共通語として、日本でも企業における公用語として英語の重要性が高まっている。渡邊先生は「英語を学ぶ、英語を身につけることは、自分の生活の質を向上させる手段の一つです。海外旅行で見聞を広める、洋画鑑賞の際に字幕では表現しきれない微妙なニュアンスに触れて新たな体感を得るなど、英語は生活の幅を広げます。英語によって広がる世界を、これからも伝えていきます」と話した。

「自分の住む新潟や日本について、そして自分について英語で語るができる“国際人”として世界へ飛び出してほしいものです」と平井先生は望んでおり、そのためにまずできることとして、三本先生は「自分の隣にいる人と話すことから始めましょう。相手を知ろうとすること、自分を話せること。真のコミュニケーションが取れる人は、世界のどこへ行っても、コミュニケーションを取ることができます。その共通言語こそが英語なのです」と強調した。



字幕翻訳家になる夢に向かって、
英語力と日本語力を同時に高めています
木村 絢さん(3年生・準1級合格)

父の仕事の都合で小学5年から中学2年までアメリカで生活しました。帰国後、中学3年で英検2級に合格。高校入学後は準1級に挑戦してきましたが、実力が伴わず、あと一步のところまで不合格に。そこで、とにかく単語に焦点を絞って学習し続けると、長文を読むスピードが速くなりました。授業で取り組んできたライティングの力も役に立ち、今年、念願叶って、準1級に合格できました。将来は英語を使って仕事をしたいと考えています。夢は映画の字幕翻訳家。英語でなければわからない微妙なニュアンスを日本語で伝えられるように、日本語力も同時に高めていかなければと思います。



苦手な英語がいつしか得意に。自分に自信ができました
神田采茄さん(3年生・2級合格)

私はあまり英語が得意ではなかったんです。高校卒業後は歯科衛生士になるつもりでした。でも、海外ホームステイを経験して、夢ががらりと変わりました。英語を話す楽しさを実感して英語が好きになり、勉強も楽しくなりました。そして実力が伸びて、好きな英語を生かした仕事がしたいと考えるようになったのです。今では学習法も変わりました。ただ文法を覚えるだけでなく、リスニングやディクテーションにも取り組んでいます。そして、今ある力を試そうと英検2級にも挑戦。合格通知を手にしたときは、万代高校に来て、英語をがんばってきてよかったと心から思えました。こうして英語をがんばっていると、他の教科にもやる気が出てきて、最近では数学の成績も伸びてきました。いつか1級に合格する日を夢見て、これからも英語と向き合い続けます。

万代高校の校内研修

《 英語力アップのために教員も校内研修 》

小池和公教頭によれば、「万代高校の英語科教員はドリームチーム」とのこと。一人ひとりが教科「英語」に対してしっかり向き合い、自身の英語力を伸ばすことに日々努力し、その成果を授業の場で生徒たちに還元している。そんな教員の姿勢に触発され、毎回英検が実施された後、最新の英検1級の読解問題やTIME誌の英文を素材に学習会を実施している。



万代高校・英語科の先生方